

第2回統計実践ワークショップ

ワークショップ概要

データ・統計分析を使って研究を行う人文学・社会科学の若手教員3名による研究発表を予定しています。ワークショップ後には懇親会（人数制限あり）を企画しています。他研究科の教員がどのような研究を行っているか、どのような統計手法を使っているかに興味のある方の参加をお待ちしております！

ワークショップ詳細

日時：2023年1月13日（金曜日）15:30から18:00

場所：大阪大学 豊中キャンパス 国際公共政策研究科6階会議室

プログラム

発表1 五十嵐彰 人間科学研究科

発表タイトル：誰が不倫をするのか

概要：芸能人や政治家の不倫をニュースで目にしたり、周りの人の不倫ゴシップを聞いたことが一度はあるだろう。身近な不倫だが、私達は不倫の何を知っているだろうか。アメリカでは離婚研究の一環として不倫研究が進んでいるが、日本では不倫の研究は驚くほど進んでいない。本発表では社会学の観点から不倫を研究するため、発表者が収集したデータを統計分析した結果を共有する。どういった属性の人が不倫をしやすいのか、そして人は「不倫をしている」と正直に回答するのか、という内容を概観しよう。

発表2 鎌田拓馬 国際公共政策研究科

発表タイトル：**Bless or Curse for Organized Crime? The Long-term Consequences of An Energy Transition from Coal to Oil on the Yakuza**

概要：Research highlights that the abundance of natural resources leads to the demand for organized crime that provides private protection. Yet, less is known about how people sort in organized crime when the demand for natural resources declines. This study investigates the supply for organized crime by exploiting a negative labor shock to natural resources. It focuses on coal mining job loss triggered by an energy transition from coal to oil in the 1960s and Japanese organized crime, the yakuza. Coal miners, with lower opportunity cost of crime, sorted into competing yakuza organizations upon the energy transition. Given that joining a yakuza organization is an irreversible investment, once the criminal trajectories were set, the yakuza's activities persisted. I show that after the energy

transition, conflicts of the yakuza intensified in areas with more competing coal mining companies that experienced greater mining job loss, and this effect persisted over a half-century later. Today, those areas have a greater number of yakuza organizations, higher competition among different yakuza organizations, and a greater number of yakuza members. The results reveal that a labor demand shock can have long-lasting effects on organized crime.

発表3 菅原裕輝 人文学研究科

発表タイトル：デジタル科学哲学研究の紹介

概要：「科学哲学」は科学という営みを理解することを目指した哲学の一分野である。「デジタル科学哲学」は科学という営みを理解するためにデータサイエンスなどの計算論的手法を用いる、比較的新しい哲学分野である。科学実践において頻繁に使用されている語の量的分析が主な研究課題となっている。「科学哲学」という学問分野の特徴の一つとして、個別の科学の方法論に対して実際の事例を基にして批判的に検討することが挙げられる。「デジタル科学哲学」もそうした特徴を継承しており、無批判に計算論的手法を用いるのではなく、自身の科学的手法に対して内省的な視点を常に持ちながらデータ分析を行うという特色を持っている。本発表では、発表者がこれまでに行ってきた、名詞mechanismの分析と、動詞explainの分析について紹介しつつ、テキストに対する計算論的な分析手法（とりわけ、テキストマイニングなど）の方法論について批判的検討を行いたいと考えている。

懇親会

参加希望の方は以下のリンクから申込みをお願いします。人数制限（15名前後）を設けるため、早めの申込みをお願いします。

第2回統計実践ワークショップ後の懇親会（1月13日開催予定）

問い合わせ先

松林哲也（国際公共政策研究科 matsubayashi@osipp.osaka-u.ac.jp）

